



第1回竹細工教室

古くから伝わる伝統工芸品を自作することで、より深い愛情や理解を育てさせようという「第一回竹細工教室」が八代市の日奈久小学校で開催された。

最近では小刀を使う機会が少なく、参加した28人のチビっ子も真剣そのもの。

日奈久竹細工の技術者、桑原健次郎さん（53歳）の指導で竹箆ができてあがると大喜びだった。

県ではこの竹細工教室のほか陶芸教室も開催し、伝統工芸啓蒙普及に努める。

民話



古屋の

もりぞう

天草郡新和町小宮地

柳 登美夫

昔、大宮地の下ん釜の山の中に、とらのおおかみという動物が住んでた。とらのおおかみは、晩になると人里にやってくる。そして、里に住んでる人間はおどすのが好きだった。とらのおおかみは、世の中で一番に強いのは、人間ではなくて自分であると自慢していた。

恐しか！
：（古屋のもりぞうとは古い家の雨もりのこと）（まるで、おるが一番に強かと思うとつたら、外にも強かとおどすか）とらのおおかみは、びっくりして少し気が弱くなった。
すると家のものかげに隠れていた馬泥棒が（これは、よかところへ馬が来た、こりゃよか、おとってやろう）と、とらのおおかみに飛び乗った。
びっくりした、とらのおおかみは：（たいへんだおるより強か古屋のもりぞうがおるはとかまえた）とらのおおかみは逃げる。馬泥棒はぶり落されんようにしがみつくと、しがみつけばつくとどらとおおかみは走る。馬泥棒はとらのおおかみの首にしがみつくと、とらのおおかみは、首をしめられ、殺されるのではないかと走る。
ところが馬泥棒は、山ん中であつて落ちてしまった。ごろんごろん馬泥棒はころんで、深い深い穴の中へはいってしまった。（ああ良かった生命が助かったばあ）とらのおおかみは考えながら、そつと穴の中をのぞいてみた。
でも穴の中は暗くてわからん。そこへ物好きの猿がやって来た。
「どらどらおれにも見せる」、猿も穴の中をのぞいた。
「見えん、見えん」と猿は言った、猿は、にやにや笑いながら自分の尻尾をすするりすると穴の中へ入れた。
真暗い穴の中にいた馬泥棒は、猿の尻尾をぐつと握りしめた。
「いたか、いたか」猿はべそかけながら尻尾を引ばった。ところがぶすりと大きな音がして、尻尾が切れた。
それから、猿の尻尾は短くなり、赤くはれた。

もっこす

幕末に来たフランス人の感想だっと思うが、かれは日本をみて、
「日本人は自然に恵まれている。神は不公平である。アジア人に豊かな自然を与えている。」
と書いていたのを読んだことがある。

たしかに、自然の恩恵の少ないヨーロッパ人には、自然に恵まれた日本をみてそう目に映ったかも知れない。
ヨーロッパには、地味が瘦せ、荒寥とした土地が多く、これに比べて東南アジアや日本が自然に恵まれているのは事実であろう。

我々日本人にはこのように他の国の土地に比べて、自然に恵まれていたせいだ、昔から他の国と違った自然観をもっていた。

自然とは我々を温く包み、豊かな恵みを提供してくれるものであって、自然と人間が対立するものとして自然を征服して、支配しようとするものではなかった。

「万葉集」「古今集」の昔から今日まで、美しい自然や繊細な季節のうつりを詠った詩歌文字や、自然のただすまいを写した絵画、工芸品の数は多い。
又、庭園をつくるのにも、山水の姿を取り入れ、自然の形をつくりその再現に

努力し、西洋諸国のように人工による整然とした計画された、自然をつくらうとはしなかった。

しかし、豊かな自然は、そのまま人間に豊かさを与えてはくれなかった。

そのため、我々の祖先は長い歴史の中で、原野を開き、水を取り入れ、道路をつくり、橋を架け、河川や土地の改修などに汗を流してきたが自然との調和を守り、決して自然を破壊しようとはしなかった。

他の土地に比べて恵まれた自然の中にあって、我々日本人は自然を愛し、大切にし、自然との調和を守り、ともに生きようと努力してきたのである。

近年我々は、生活の合理化・近代化を営むため、生活環境の向上を急激に求めるあまり、自然との調和を失い、破壊を行ってきたのではないだろうか。

豊かな自然は、人間にとってかけがいのないものであり、人間生活に潤ある豊かで健康な生活を与えてくれるものである。

人間が自然を構成する生物の一員である以上、自然の仕組と働きを充分知り自然との調和を図るべきであろう。

祖先から受け継いだ豊かなこの自然、ふるさとの風土を守り、住みよい環境を維持し、孫に残してゆくため、いま我々は人間と自然との関係を改めて真剣に考えてみるべきではないだろうか。

(T・O)